Wilfred R.Bion 研究（Ⅳ—1）
——“抑うつ的次元”としての「不在の乳房」——

祖父江　典　人

Ⅰ、はじめに

精神分析の革命児Wilfred R.Bionは、彼の人生を翻弄していた幼少期・青年期の「不在の乳房それ自体」から着実に歩を一歩ずつ進め、遂には前稿（祖父江、2004b）で論じた「不在の乳房の認識論」にまで、その耐え難くも名状しがたい“ベータ要素”を噛み砕き消化しようと格闘してきた。それには、体制乳房Klein,M.との“幸福な結婚”が、その消化を助けるに余りあったわけだが、本稿で論じる、いわゆる「精神分析第三期」のBionは、そのKlein,M.との死別から出立したところに、そのスタート地点を置いている。

“別れ”が“始まり”となるところが、いかにもBionらしく、「不在の乳房」の標榜に似つかわしい。しかも、Bionは、この“別れ”を、「無い乳房no-breastがある」、というように「幻覚症的変形」を行うのではなく、その“不在の痛み”を噛みしめ、その意味を認識論的極限にまで突き詰めようとした。それがBionの考案したグリッドGridである。

「精神分析第三期」のBionは、不在の認識論を通過し、グリッドから究極の現実Oまで、その思索の向かう先は、認識論的精神分析から、それを踏み越えたところにまで、その領野が及んでいる。まるで、宇宙の果てにまで“突破”していこうとするかのごとく、である。

さて、Bion精神分析の核心である、この時期の思索への突入に勇む前に、「前−概念preconception」として、まずは、「認識論的精神分析の時代」のBionの個人的背景を振り返っておくのも、無駄にはなるまい。

Ⅱ、「認識論的精神分析の時代」のBion

「認識論的精神分析の時代」は、1960年代初頭から、1968年にBionが突如イギ

リスでの仕事や地位をかなぐり捨て、カリフォルニアに移住するまでの時期に相当するだろう。彼の実年齢で言えば、60歳代全般に亘る。この時期に、Bionは、『経験から学ぶこと』（以下『経験』と略記）（(1962b)、『精神分析の要素』（同じく『要素』）（1963)、『変形』（1965）などを著した。今日の見解からすれば、Bionの真骨頂、オリジナリティとして、もっとも評価に値する著作群である[注1)]。なかでもその思索の眼目は、グリッドと究極の現実Oの着想にあるだろう。だが、これらの著作は、難解、晦渋だとして、発表当初は、Bionと同門のクライニアンさえからも、「むしろ猛々しい怒りを覚えた」(Meltzer,D.1980) と、“怒り”もて迎えられた。それにしても、60歳代にて最も革新的で斬新な仕事を展開するとは、大器晩成では飽き足らない、Bionの底知れぬ“未飽和性”を感じさせずにはいられないところである。

先にも触れたように、この時期のBionは、師であるKleinとの死別の痛みを噛みしめるところから出立することとなった。Kleinの死は1960年。それからBionの最も斬新な仕事が開花したのも故なしとはしないだろう。

もっともBionは、1953年にKleinとの８年間に亘る個人分析を終えているので、その時点で師弟関係には一応の区切りはついている。Bionは、持ち前の自己抑制的な性格のためか、Kleinとの個人分析については多くは言を費やしていない。分析の終結を申し出たのは、Bionの方からのようだが、それとてもBionはその動機について、詳らかにしてはいない。ただ、「私の感覚が私に告げ知らせるところに耳を傾けなければならない」(Bion,W.R.1985) と、いささか思わせぶりな嘆息を漏らしているのみだ。

だが、その後もKleinとの親交は続いたようだ。たとえば、1955年には、ジュネーブの国際精神分析学会で、Elliott Jaquesと共にKleinに同行している。そこから妻Francescaに当てた手紙（２冊目の自伝『思い出される限りでの私の罪』(1985) に所収）には、さすがにKleinに対する個人的慨嘆を漏らしている。「メラニーはとんでもなく要求がましいんだ。思うにそれは、彼女がとても多くの攻撃を受け、人生で本当の幸せがなかったせいなんだろうけど。でも私は、いつもカラカラに吸い尽くされてしまう」。これからしても、BionにとってKleinとの関係が、分析終了後も忠誠心を要求されるような類の、容易ならざるもの

であったことは、想像に難くない[注2)]。

Kleinの死に対するBionの直接の反応は、自伝等からも窺い知れない。ただ、Bléandonu,G.（1994）も言うようにKleinの死後すぐにして、Bionの創造性が頂点を迎え始めた、ということは特筆すべきだろう。Bionの内的プロセスとして、どのようなモーニング・ワークが遂行されたのか、傍からは窺い知れないところがあるが、「遅れてきた青年」（松木、2001）として、Bionが才能を開花させた背景には、Kleinとの別れがBion内部の“不在の乳房の幻影”と響き合い、その「経験から学ぶこと」も一役買ったことであろう。Bionの“学び”は、常に“不在”との遭遇から“勝ち取られ”ているように思われる。

さて、自らのオリジナリティに邁進したこの時期のBionにとって、Kleinとの別れ以外には、特記すべきことは少ない。私生活は家族のために時間を多く費やし、妻や３人の子どもとの心和む交流など、幸せなものだったようだ。また、1962年から1965年までは、イギリス精神分析協会会長を務め上げ、他にも要職をこなすなど、Bionの「社会的成功は疑うべくも無い」（Bléandonu,G.1994）のであった。

人生の安寧を手に入れたBionには、いよいよ「不在の乳房」の認識論を突き詰めていく下地が整った。それが「不在の乳房」を「思考すること」のテーマとして、幕開けるのである。

Ⅲ、『経験』とは何か――「不在の乳房」の抑うつ的次元

１）精神分析的認識論の曙――思考生成の３種

前稿（2004b）で筆者は、Bionの「精神病の精神分析時代」の「不在の乳房」を俎上に載せ、破壊的な投影同一化や羨望の底には、妄想分裂ポジションにおける排除・剥奪感からくる「心的苦痛」が「不在の乳房」として象徴的に結晶化されていることを論考した。すなわち、それまでBionの人生を翻弄してきた「不在の乳房それ自体」は、「精神病の精神分析」の時代になると、その本質は“ない”ことへの“痛み”にある、と認識論的に把捉されるとば口に立ったのだ。

その後Bionは、1960年代の「認識論的精神分析の時代」になると、1960年に

他界したKleinの楔から解き放たれたが如くに、自由な思索の領野へと飛び立つ。彼はもはや、「自分がクライニアンかどうかに思い悩むことはなくなった」(Bléandonu,G.1994)。Bion（1992）自身も、「一方ならぬ患者が、私のテクニックは、クライニアンではないと言った。私もその言にはいくらか実質があると思う」と、自認している。そのターニング・ポイントとなった論文が、「思索についての理論A theory of thinking」（1962a）である。この論文でBionは、「前概念」「アルファ機能」「アルファ要素」「ベータ要素」「もの想いreverie」などの、「連想の陰影」を伴わない用語や造語を始めて登場させ、精神分析的認識論の“新天地”を私たちの前に開陳し始める。さらにその後、これらの概念を本格的に活用し、『経験』『要素』『変形』と、さらに抽象化された思考理論を世に問うていったのである。

筆者（2004a）は既に、Bionの思考理論について「共感」との関連で論考したことがある。「思索についての理論」を突破口とした、思考生成の3種の道筋は、その後のBionの難解な認識論を理解する上でも、肝心要の部分を形成しているので、ここで今一度整理しておきたい。

Bionは思考の発達の道筋に関して、3通りほど考えを示した(Spillius, E. B. 1988)。ひとつは有名なコンテイナー/コンテインド論で、次は前概念と現実との一致からの思考の生成であり、最後に、「不在の乳房」からの思考の発達である。

コンテイナー/コンテインド論は、母子関係論でもあり、治療関係論でもあるが、その考えがわかりやすく端的に示された記載として、「連結することへの攻撃」(Bion,W.R.1959）の中から引用してみよう。「幼児の泣き声を、母親にいて欲しいという要求以上のものとして母親が取り扱うべき」であり、「母親は、死につつあるとのその子どもの恐怖心を彼女のなかにとり入れ、そんなわけだったのかと体験すべきだった」。ここにはBionが「もの想いreverie」と名づけた、母親側の直観的な理解力が記述されており、その機能によって母親は幼児の恐怖の中身を読み取り、それを包み込み、幼児に耐えられる形にしてそれを戻していく営みが描かれている。さらに幼児は、その後、母親のもの想いの機能自体をも自己の中に取り入れるようになり、不安の消化能力を高めていくの

である。

Bionが提唱しているこの思考生成の道筋には、いくつもの要点がある。すなわち、幼児のこころに情動的経験が“正しく”思考として芽生えていくためには、まずは、苦痛な感覚印象（上記の例でいえば「いい知れぬnameless」空腹感）を“泣き声”として発信できる能力が幼児に必要とされること。さらに、その発信を受信するレセプター（母親）が傍に存在する必要があること。しかも、受信した母親には、その“発信”のメッセージ内容を直観的に理解できる「もの想い」の能力が必要であること。そして、このような“関係性”の中で、苦痛な感覚印象は、情緒的意味を含んだ“空腹の経験”として、質的変容を遂げていくこと。この質的変容を経てはじめて、幼児のこころの中には“空腹”という概念が情緒的実感を伴って内在化されること。そして、遂に幼児は、母親の「もの想い」の能力をも取り入れ、苦痛な経験の自浄能力を高めていくこと。

ここで、感覚印象から思考へというプロセスに絞れば、名づけられない感覚印象としての“空腹感”→感覚的実感を伴った“空腹感”→概念としての“空腹”という思考生成の道筋を読み取ることができるのである。Grotstein,J.S.（2004a）は、この母親を介在させた、母子関係での思考の循環サイクルを「認識論的存在論的現象サイクル」と名づけた。

さて、たびたび指摘されるWinnicott,D.W.のホールディング概念との異同だが、Ogden,T.H（2004b）の近年の論考を参考に整理したい。ホールディング概念において示されているのは、「環境としての母親」（WInnicott,D.W.1958）の「原初の母性的没頭」（Winnicott,D.W.1956）に抱かれ（ホールディングされ）、乳児は「存在の連続性going on being」と、後には「自分がまとまる」感覚を体得していく、というプロセスである。すなわち、ホールディングは、乳児を腕の中にやさしく強く抱く母親のイメージが色濃く随伴し、母子密着の情感的印象が強い概念である。一方、コンテイナー／コンテインド論は、上記に述べてきたように、情動的経験が、二者関係における力動的相互関係を通して思考として内在化されていくプロセスを描き出した、思考生成の説明概念である。すなわち、このふたつの概念には、「情感」と「思考」という“肌合い”の違いが色濃く感じられるところだが、「分析的経験を異なった観点から見たもの」（Og-

den,T.H.2004b）という見解が妥当な線なのかもしれない[注3)]。

2番目に挙げたBionの思考の発達論であるが、彼は、Freud, S.やKlein, M.と同様に、人には生まれる以前から生得的な知識があるものと想定した（Bion,W.R.1962a）。それが彼の言う「前概念」である。したがって、赤ん坊は乳房という前概念を生まれながらに持っており、それゆえに乳房と出会った時、それを口に含む。それによって、赤ん坊は乳房という現実と出会い、生得的な前概念は実感で満たされる。こうして赤ん坊は、前概念から、実感とつがった乳房という概念を手に入れ、思考の発達が育まれていく、というのである。

これは言って見れば、Bionの「良い乳房」論であろう。実感とつがった乳房の体験には、空腹感を温かいミルクで満たしてくれる「良い乳房」体験が、情感を伴った思考として内在化されていく過程が唱えられているのである。

それにしても、「前概念」という考え方を、Bionはなぜわざわざ導入したのだろうか？　しかも、Bionの「前概念」は、FreudやKleinとは一味違い、現実と出会い実感で満たされるのを待っている「空虚な思考」という意味合いまで含み込まれている。すなわち、意味で飽和されていない“空”の思考なのである。「良い乳房がある」という、ポジティブな思考生成の動き出しにおいてさえ、“空”という“不在”の影を引き摺っているところが、いかにもBionらしい“思索の姿”と言えるのだ[注4)]。

Bionの思考生成の定式化は、次の「不在の乳房」論において、最もBion（1962a,b）らしいオリジナリティを遺憾無く発揮していく（祖父江、2004a,b）。Bionは、赤ん坊が眼前の乳房の不在に耐えられた時には、「無い乳房（no breast）」という思考を獲得し、耐えられない時には、「無い乳房がある」、すなわち「悪い乳房（bad breast）」が出現したという、誤った概念化が行われると唱えた。そして、後者の場合、不在や喪失や分離の意味は獲得されず、健康な思考の発達は阻害されるという。ここでBionが強調しているのは、“不在の認識”というテーマである。乳房への期待とその乳房がないという事実の結合からくる、陰性の実感（negative realization）においてこそ、（それに耐えられれば）不在や喪失という“負の意味”が正しく獲得されるという認識論である。

そこに筆者はBionの真骨頂を見る。すなわち、ここには赤ん坊の口と乳房は現実には結合していないのだが、その結合の不在からも意味は生成されるのであり、その意味の生成によって、不在の乳房という概念化が生まれ、結局不在は思考によって埋められる。現実にはつながっていなくても、心理的次元では思考によるつながりを見出せるという、深遠なパラドックスが見て取れるのである。

言うまでもなく、ここで、Bionの思考の照準は、「不在」に焦点づけられている。「不在の経験」「不在の乳房」「不在そのもの」をいかに認識するか、という「不在」の認識論なのである。「よい乳房」体験の概念化においてすら、“不在”の影をちらつかせていたBionは、遂に「不在そのもの」への概念化へと突入した。そして、ここにおいてBionの思考生成論はもっとも強烈な輝きを放っている。

「思索についての理論」と同じ年に書かれた著作『経験』では、この「思考」の射程を「経験」の領域にまで広げ、パーソナリティを構成する諸因子を「思考」や「経験」との連関の中で、思索を深めようとした。Bionはさらに大きな海原に船出したのだ。その思索の航跡を「不在の乳房」との兼ね合いの中で、次に検討していきたい。

2）『経験から学ぶこと』と「不在の乳房」

a）「思考」「経験」の蓄積としてのパーソナリティ

『経験』は、Bionの思考理論を、より大きな単位であるパーソナリティの領域にまで拡張させ、人間理解の認識論的本質論を目指したものである。

まず彼は、「パーソナリティの中に諸因子があり、それが組み合わさって私がパーソナリティの諸機能と呼ぶ安定した単位を産出すると仮定することにする」と論を切り出す。そして、その諸機能の中で、もっとも「本質的に重要」なものが「アルファ機能」だと明言する。アルファ機能は、先の項で登場した「もの想い」の能力の言い換えである。すでに「思索についての理論」で名前を出していたが、Bionは『経験』以後、もはや「連想の陰影」を伴う「もの想い」という用語を使うことはなく、「アルファ機能」で押し通していく[注5)]。

Bionは、この「アルファ機能」を、パーソナリティを形成する上で最も重要な機能だと位置づけた。これは何を意味することになるのだろうか？

アルファ機能は、そもそもBionの思考の理論の中で、中枢の役割を担っていると言ってもよい。先の項で取り上げた、幼児の泣き声の例で言えば、“空腹感”という生々しい感覚印象が、情緒的意味を帯びた“空腹”という概念として乳児のこころに内在化されるためには、母親の「もの想い」、すなわちアルファ機能が不可欠とされた。アルファ機能によって、はじめて苦痛な感覚印象は、“経験”として貯蔵（内在化）されるのである。

ここでBionは、実のところ大胆な定式化を行っている。すなわち、Bionはパーソナリティの核を形成するのは、「思考」であり「経験」である、と言っているのだ。アルファ機能という思考機能によって変容された“経験”が貯蔵・蓄積されていった総体がパーソナリティである、というのである。

こうしてBionは、パーソナリティの精神分析的認識論を打ち出した。もう一度確認すれば、パーソナリティはアルファ機能によって変容された“思考”“経験”によって構築されたものに他ならない。

さらにBionは、「経験」、すなわちこれは「情動的経験」を指すが、その「経験」の蓄積のされ方いかんによって、パーソナリティの構成は2種に分かれる、と考える。Bion（1957a）はすでに、パーソナリティには「精神病部分」と「非精神病部分」が並存することを提唱し、前者が優位な場合に精神病、後者が優位な場合には神経症レベルに留まることを提起したが、この考え方の基本は終生変わらなかったようだ。『変形』（1965）においても、Bionは、「私は、精神障害が神経症と精神病という二つのカテゴリーのいずれかに当てはまると仮定する」と明言している。つまるところ、「経験」の蓄積のいかんによって、「精神病パーソナリティ」か「非精神病パーソナリティ」かが優位になるというわけだ。

『経験』において、Bionは、「精神病パーソナリティ」の内実に関して、彼一流の抽象的説明概念を駆使して、さらに考えを深化させる。すなわち、「精神病パーソナリティ」においては、アルファ機能が障害され、生の感覚印象は「変形」されないままに残る。したがって、ベータ要素に留まっている感覚印象は、

記憶や夢思考として貯蔵されることなく、「消化されていない事実」として排出されるほか道がない。遂には、それらのベータ要素は、「ベータ幕」や「奇怪な対象」というおどろおどろしい凝塊まで形成するに至る。ここまでくると、患者は夢に似た混乱や幻覚状態を“目の当たり”に”する、とBionは説いていくのである。

一方、「非精神病的パーソナリティ」においては、アルファ機能が正常に作動し、生の感覚印象はアルファ要素に変形される。この結果、“消化された”感覚印象は情動的経験として貯蔵され、「意識的思考そして夢思考に利用できる」ようになる。さらに、このアルファ要素は増殖するにつれ、「接触障壁contact-barrier」を形成する。この「接触障壁」は、「意識と無意識の間の接触の確立と、一方から他方への要素の選択的通過」を意味している。これによって、意識と無意識は選択的透過性の境域が築かれ、こころは暴力的な感覚印象の侵入から保護される。このアルファ機能に関しては、次項の「夢見ること」との関連で、さらに詳細に検討することになる。

このように、Bionが想定したアルファ機能は、人のこころの健康を保つ上で、中枢的な役割を担っている。そして、そのアルファ機能によって生産された「思考」こそが「経験」として堆積し、パーソナリティを健康に醸成する土壌となるのだ。まさに、Bionのいう“経験”の内実は“情動的思考”と措定してもよいだろう。

Bionは、さらにこの“情動的経験”を構成する関係性の因子として、L (Love)、H (Hate)、K (Know) を抽出する。そして、Kこそが「分析者にとって重要な、経験によって学ぶことと密接に関係した結合」と言明する。LやHも情動的経験を醸成する上で重要なものの、あくまでもBionの比重の掛けどころは、Kである。もとよりKとは、アルファ機能の流れを汲んだ思考機能であるが、この後Bionの思索の中で、さらに重要度を増していくキー・ワードとなるので、「K結合」の項であらためて検討したい。

さて、ここで、Bionのいう「経験」について、幾人かの臨床家がコメントを残しているので参照したい。Bionの「経験」の内実がさらに浮き彫りになることだろう。

Godbout,C.（2004）によると、Bionの言う情動的経験とは、「欲動、感情、感覚、情緒のようなメタサイコロジカルな区分が当てはまらない包括的概念」であり、「心的生活のすべての範囲を囲うような総称的用語」である。これは、次のO'Shaughnessy,E.（1981）の指摘とも響きあう。つまり、「Bionの理論は、神、世界、人間に対する哲学的、抽象的な思索をめぐらせたものではない」。あくまでも、「人間関係humann linkとしての思考」であり、「自己や他者を知るための情動的経験としての思索」なのである。Ogden,T.H.（2004a）になると、Bionの言う情動的経験は、まさにその経験を“生きる”ものであるとさらに踏み込み、『思索』からBionのことばを引用する。「精神分析の著作は、分析の情動的経験に極めて近い経験を生み出すものだ」、「本が研究の対象とならないなら、そして本を読むことがそれ自体情動的経験にならないなら、読者にとってその本は失敗だろう」。すなわち、「経験」とは精神分析体験であろうと、読書体験であろうと、それはその経験を“表象”することとは対極的な“ともに生きる”類いのものなのだ、とOgdenはBionの「経験」を体感している。

このように、「思考」から「経験」の蓄積としてのパーソナリティへの道筋は、思考理論を精神分析理論の中核に置くBionとしては、必然の帰結でもあったように思われる。しかも、その「思考」やそれから成る「経験」を、上記の論者たちが言うように、哲学的、抽象的概念のように情緒性を棚上げすることなく、経験の意味合いの深化としての“情緒的思考”たらんとさせようとしたところに、臨床との繋がりを見失わないBionの面目躍如たるゆえんがある。PS⇔Dや♂♀という「選択された事実すら、まとまりcoherenceの発見の感覚という情動的経験」（『経験』）なのである。Bionは決して思考における情緒性を削ぎ落としはしなかった。Bionの思考理論は、まさに「情緒を考えるthink emotions」（Grinberg,L.2000）という表現が壺にはまるのである。

ここからさらに「不在」を認識論的にいかに突き詰めるかという、「不在の乳房」とK結合の連関が俎上に上るところだが、その前に、Bionは『経験』において、「夢思考」「夢見る」といった「夢」を巡る概念化を、それとは押し出さずにたびたび登場させている。そこには、先の項で論考した思考理論からのさらなる展開が見られるので、Ogden,T.H.（2003,2004b）の論を参考にしながら、

Bion思考理論の深部にさらに進みたい。

b）アルファ機能の最深層：「夢見ることdreaming」

『経験』において、Bionは、思考を巡る用語として、“考える”“考えること”などの他に、新たに“夢見るdream”“夢思考”などの“夢”ということばを使った言い回しを展開し始めた。「睡眠において生じる情動的経験は――目下のところありえそうな理由からそれを選んだのだが――覚醒生活の間に生じる情動的経験と違わない。両者において、情動的経験の知覚は、アルファ機能によってワークされ、その後それらは夢思考として利用されうる」（『経験』）。

Bionにはことさら「夢見ることdreaming」を概念化しようとする意図は見られないが、Ogden,T.H.（2003，2004b）は、『経験』から思考のタイプを３つ析出した。すなわち、「夢見ることdreaming」、「もの想いreverie」、「考えることthinking」である。これは先の項で述べた、アルファ機能の３弁別と考えられる。

Ogdenの説明に倣えば、「夢見ること」は、無意識的な思考過程であり、すべての思考の基盤を形成する。それに比べれば「もの想い」は、前意識的な「夢様の考えることdreamlike thinking」という位置付けとなる。「考えること」は、さらに意識的で内省的な二次過程思考である。その中で、「夢見ること」こそ、情動的経験を心的成長過程の俎上に乗せ、「意識的に生きられた情動的経験を、サイコロジカル・ワーク（夢見ること）として無意識に利用できるような方法で変換する心的操作」（Ogden,T.H.2004b）であり、アルファ機能の中で最重要視されてしかるべきものなのだ。すなわち、Freud,S.（1900）の「夢見ること」が、無意識的な「夢思考」を偽装し、意識的な夢表象に変換するのに反し、Bionの「夢見ること」は、意識的な思考すら、一旦無意識に利用できるように「無意識の思考」や「夢思考」に変換する用を果たすのである。そして、「ポジションがネゴシエートされるのは、夢の中」（Bion,W.R.1992）なのである。Bléandonu,G.（1994）によれば、「夢見ることは、真実を『消化すること』のプロセスの一部分である。それは、食べ物が身体にとって必要であるように、情緒的発達にとって必要なのである」と、Bionの言わんとするところを喝破している。

Bionは、思考機能全般に及ぶアルファ機能の最深層に、「夢見ること」という無意識的思考過程の断層を“発見”したと言えるのだ。

「友人に話している人は、この情動的経験の感覚印象をアルファ要素へと変換しており、それによって夢思考ができ、ゆえに事実について、それが彼の参加している出来事かその出来事についての彼の感情かその両者かに関わりなく、混乱していない意識を持てるようになる。彼は『眠った』ままでいることも、彼の『夢』が作る障壁を貫通できない或る種の要素について無意識のままでいることもできる。『夢』のおかげで、彼は中断されずに目覚めていること、すなわち彼が友人に対して話しているという事実には目覚めているが、もしも彼の『夢』の障壁を貫通できたならば普通は無意識である観念や情動によって、こころを支配されることに通じるような要素に対しては、眠っていることができる」（『経験』）[注6]。

覚醒しているときでさえ私たちは、アルファ機能による無意識的な夢思考を営んでおり、それによって“不要で”“危険な”刺激からこころを守り、「混乱していない意識を持てる」ようになるのだ。ここには、無意識化された思考にプライマリーな価値を置くBionの思考理論の発展・深化が見られる。

Ferro,A.（2002）も、Bionの「夢の仕事」の意義を説いている。すなわち、睡眠時の素材ばかりでなく、覚醒生活における意識的な素材も、「夢の仕事」を通過させねばならない。それによって、はじめて意識的な素材も、貯蔵や思考に適したものになるのだ、と。Ferroは、Ogden同様に、思考の基礎過程としての「夢見ること」に焦点を当てて、その意義の重要性を指摘している。

Ogdenの師匠格のGrotstein,J.S.も、Bionの「夢見ること」の概念化に格別の関心を注いでいる。まず、Grotstein（1981）は、「夢見ること」の本質に関して比喩を交えて構造的に理解しようとする。すなわち、「夢見ること」が現実を克服し、消化するように機能するためには、私たちのこころの中の幼児的部分である「夢見る夢見手」が夢を生みだし、さらにその夢物語を、私たちのこころの中の「もの想い」の部分、すなわち「夢を理解する夢見手」に明け渡す必要がある、という。そこに、「対象」としての「夢」、それを解釈するものとしての「解釈者」、解釈されたものとしての「印Sign」が生まれ、「心的空間」とし

ての三角構造が組織化される、というのだ。さらにGrotstein（2004a,b）は、「夢見ること」を、彼の提唱する真実欲動truth driveとの関連でも探究しようとしている。すなわち、「夢見ること」は、無意識的思考であり、Oを変革する媒体者であり、さらには「真実の使者」なのだ、と。ここでのGrotsteinの力点は、「真実はこころの栄養になる」というBionの箴言に基づき、「夢見ること」とこころの栄養素としての「真実」との内的連関を貫通させようとした点にある。このように、Grotsteinは、「夢見ること」をBion思考理論の要と考え、その内実をさまざまな角度から解明しようとしているのだ。

さて、諸家の見解を概観してきたが、結局のところ、Bionの思考理論を大づかみに要約してしまえば、このように表現できよう――こころの栄養を育む思考機能（アルファ機能）とその基盤の上に構築されるパーソナリティ――。

では、Bion思考理論の矛先は、こころの栄養素の問題として、とりわけ何に照準を当てているのだろうか。次には、このことが探究されねばならない。そこに、「不在の乳房」のテーゼが再び浮上してくる契機があるのだ。

c）「不在の乳房」と「K結合」

『経験』の後半から、Bionは新たに「K結合」という概念を登場させる。これは、他の二つの結合、L（愛情）、H（憎しみ）と並んで、情動的経験の基盤を構成する3因子のひとつである。

Kは、「知るKnow」や「知ることknowing」を意味する。しかも、「私はLとHは無視して、Kを論じることにする。Kは分析者にとって重要な、経験によって学ぶことと密接に関係した結合だからである」というように、最大限K結合を尊重している。すなわち、K結合とは、彼の思考理論と「密接に関係した結合」であり、「アルファ機能理論を発展させる中で、知識に関する最初の言語的定式化を行ったもの」（Sandler,P.C.2005）なのである。しかも、ここでいう「知識」とは、「アルファ要素とベータ要素の総体」であり、「それゆえに、知っていることも知らないこともすべてカバーする用語」（『思索』）であることに、注意する必要がある。すなわち、Kとはベータ要素のようなプリミティブな「思考の肝である思考とも似つかない思考」（Ogden,T.H.2004b）までをも含んだ包括的な

「知ること」なのである。

このようにKとは情緒的思考としての「知ること」なのだが、Bionのこの着想には精神分析的伝統での系譜がある。Thorner,H.A.（1981）が総説的に論じているので参照したい。

そもそもFreud,S.（1905）は、赤ん坊の誕生に向かう子どもの性的好奇心を、知識欲望desire for knowledgeと表現した。Freudは、これを真性の本能と考えていたわけではなく、「認識本能epistemological instinct」と命名したが、後には、この本能を思考の傾向と結び付けていった。Abraham,K.（1924）は、吸啜行為に伴う幼児的快感の知的領域への「置き換え」は、とても重要な機制であり、事実の消化の成否に関わると論じた。さらにAbrahamの薫陶を受けたKlein,M.は、早期の論文では、知識本能のリビディナルな起源を強調したが、後には、母親の内部への幻想的攻撃に対する報復不安をコントロールする手段と結びつけた（Klein,M.1932）。

いずれも「知識本能」を、事態の消化や不安のコントロールという方位から、その意義を策定しようとしている。

BionのK結合には、これらの先達の歴史が透けて見えるのだが、彼の知識本能の射程ははるかに及ぶ。まず、彼は3種類のKを弁別した。Kと－KとnoKである。

Kはもとより、アルファ機能の働きのもとに育成された、情動的経験・思考を原基とする。そのもっとも早期の、もっとも原初的な表れが「口と乳房の間の関係」である。その関係が良性であれば、乳児は乳房から“こころの栄養”も補給できるのだ。

－Kに関しては、Bionは“饒舌”だ。『経験』では、「理解しないこと、すなわち誤った理解をすることによって構成された結合を表す」と端的に表現している。すなわち、－Kは、「知識の欠如ではなく、快感に基づく知識であり、破壊性に由来する」（Sandler,P.C.2005）。すなわち、「偽りの思考」であり、「嘘」であり、羨望に基づく「悪性の知識」（妄想、幻覚）の“増殖”なのである。

Bionは、「傲慢さについて」（1957b）の論文で、精神病の3要素としての「好奇心」「傲慢さ」「愚かさ」を提唱した。知識本能が神をも恐れぬ所業にまで昇

り詰めれば、バベルの塔やエディプス神話に見るように、破壊的な帰結は避けられない。Bionはこの傲慢さに基づく“万能的”な－Kを、すでに1957年には打ち出していたのだ。さらに『経験』においては、Bionは“悪性”の－Kの内実を深めた。それが、「欠如性withoutness」だ。これは、羨望によって意味ある外部を剥ぎ取られた「外側を欠く内的対象」「身体を欠く栄養管」である。すなわち、羨望から成る－Kは、「剥ぎ取りが最終産物」であり、「無へと変質していく空虚な優位性—劣位性」の関係性しか残さない。まさに人格の荒廃した、“地の果て”のような世界を言い表しているのだろう[注7)注8)]。

noKは、「知ること」の可能なこころを持たない状態であり、それゆえ考えることができない。Steiner,J.（1993）の「見てみぬ振りをすること」、O'Shaughnessy,E.（1981）の「奇怪な対象の非現実的な宇宙の中に存在している精神病者」などがそれに該当するだろう[注9)]。

さて、Bion流の「知識本能」の諸相を眺めてきたが、実のところ、BionのK結合には、これに留まらない奥行きと広がりがある。ここで少しだけ触れるなら、Bionは、K結合の発想とは別に、「O」、「真実truth」、「叡智wisdom」というような「物自体」としての「究極の真実」を想定した。Oや真実は、Kとは違って、本性上“不可知”である。それらは、「考える人」を必要としない。発見されようがされまいが「考える人のいない考え」（Bion,W.R.1967）として鎮座する“超越項”である。したがって、私たちはその「究極の現実」OからKへの「変形」によって、利用可能な「知識」を得るほかない。

Oのテーゼに関しては、次稿で詳述することになろう。ここではK結合、すなわち「乳房と口の結合による情動の消化」として、Bionの脳裏をもっとも捉えて離さなかった眼目とは何かに、照準を戻そう。この領域に踏みこむことで、Bionの思考理論は、さらに彼独自の色合いを鮮明にするからである。

Bionは『経験』において、こう述べている。「私たちは、悪い乳房、すなわち求められてはいるものの、不在のabsent乳房の方が、哲学者が物自体、あるいは物の現実態と呼ぶものと関係がある良い乳房よりも、はるかに考えとして認識されやすいと考える。そこにおいては、良い乳房の感覚は、乳児が実際に取り入れた母乳の実在に依存している。良い乳房と悪い乳房は、一方は飢えを満

足させる実際の母乳と関係しており、もう一方は、その母乳の非実在と関係しているので、両者は、心的性質において異なるに相違ない」。

ここでBionは、「不在の乳房」、すなわち、求められても得られないがために、「悪い乳房」に変質してしまう“乳房”の方が、先に観念化されやすいと言っているのである。さらに『変形』になるとBionは、「思考の発達は、無－物no-thingと、それに近いと感じられる現実化との相互作用に依拠している。そして、この文脈で私が言わんとするところは、思考は、対象の不在において問題が解決されることを可能にする、ということである。実際のところ、対象が不在でなければ、問題はどこにもない」。

「対象が不在でなければ、問題はどこにもない」。この魅惑的なフレーズは、Bion思考理論の“芯”を突いている。すなわち、Bion思考理論は、“不在”を核心のテーマとしているのである。良い乳房は、「母乳の実在に依拠して」自ずと血肉化されるので、案ずるには及ばない。「不在の乳房」こそ、－KやnoKとして、「悪い乳房」に変質しやすいので、「回避」ではなくて「思考」として消化せねばならないのだ。

Bionは「良い乳房」をほとんど見過ごしている。K結合の眼目としてBionが特別の“視線”を送っているのは、やはり、「不在の乳房」なのだ！

アルファ機能の“濾過”を通した、この「不在の認識」のテーマは、すでに何度も形を変えて登場してきた。では、実際にはBionは、「不在の乳房」というこの厄介な“未消化物”を、－KやnoKの陥穽に落ちることなく、貯蔵可能なKにどのように「変形」するというのだろうか？　そこに「不在の乳房」の伝達としての、「解釈」の問題が浮上するのだ。

3）「不在の乳房」の「解釈」―― 抑うつ的次元と新次元の“予感”――

「不在の乳房」の「解釈」の問題に関しては、筆者（2004a,b）は既に、精神病レベルの“分離”や“剥奪”のテーマとして論考した。そこで私たちは、「攻撃性」や「羨望」の背後に“ないことの痛み”を“もの想う”Bionの眼差しに出会ってきた。そして、Bionの「解釈」とは、基底に存在する“剥奪からなる痛み”を“もの想う”ことにより、“剥奪そのもの”は不変にしろ、ことばに

よって架橋しようとするパラドキシカルな営みであることを見てきた。すなわち、“剥奪”という「不在の乳房」は、「もの想い」によることばの“母乳”によって、象徴的に埋められようとするのである。

ここでBionは、「不在の乳房」を、妄想分裂ポジションの「剥奪」のレベルであれ、抑うつポジションの「分離」のそれであれ、“心的苦痛を伴う不在の認識”という、いわば“抑うつ的次元”で扱おうとしていることを押さえておきたい。

「認識論的な精神分析の時代」になると、Bionは、臨床素材を開陳していないので、彼の解釈の実際は詳らかにはされない。しかし、先のBionの言、「対象が不在でなければ、問題はどこにもない」に象徴されるように、Bionの眼差しの向かう先は、一層「不在の乳房」に照準が当たっていたに相違ない。そこでは、「不在の乳房」を「抑うつ的認識」に“変形”させる「解釈」が重要性を増してしかるべきなのだ。

Bion自身は、「解釈」に関してこう言及している。「役に立つ解釈は、達成Achievementの感覚と抑うつ感情を充分に生じさせる」(Bion,W.R.1970、1994)。Bionが解釈によって、「達成」という“実感”を伴った、「抑うつ感情」の生成を狙いにしていたことは、ほぼ間違いないだろう[注10)]。「抑うつ感情」は、“不在の認識”において随伴する「心的苦痛」とほぼ同義と見てもよい。ことばを換えれば、「不在の乳房」の“認識”とは、「不在」を「モーニング・ワーク」した結果、「心的苦痛」とともに「不在概念」を獲得することに他ならない。この意味で、「不在の乳房」の認識、すなわちモーニング・ワークが、“抑うつ的次元”において進むとみなすのは、異論のないところだろう。

抑うつ的次元の「不在の乳房」論として、先稿（2004b）で筆者は、長年Bionにスーパービジョンを受け、その後親交を保ってきたMason,A.（2000）が「攻撃性」の背後に「絶望感」を読み取る視点をBionから学んだことを取り上げた。それとほぼ同義のことをO'Shaughnessy,E.（1981）も述べている。不機嫌さの強い少女のこころを、O'Shaughnessyは、当初は“敵意”と理解していたが、Bionのおかげで、“敵意（H）”ではないK結合のキーを発見することができた。すなわち、少女の攻撃性の背後には、“鈍さ”と“死にかかった”こころが存在し、

その部分が救いを求めてコミュニケートしているのだ、と。いずれも、攻撃性という迫害的相貌を帯びた「悪い乳房」を、“絶望”や“死にそうなこころ”という“哀しみ”を伴った「不在の乳房」の認識へと、「解釈」を通して「モーニング・ワーク」を図ろうとしている[注11)、注12)]。

これらの“抑うつ的次元”とはやや趣を異にした面のあるBionとの“個人的体験”を、Gooch,J.（Davison,S.（report）2002）が述べている。MasonがBionにスーパービジョンを受けたのは1960年以降だが、Goochは、1970年代初頭から半ばにかけて、Bionとの分析体験を持った。この年代の違いもあるのだろうか、Goochの語る体験は、Bionの“もうひとつの横顔”の“証言”ともなっているので興味深い。

Goochは、以前にクラシカルな分析を受けたことがあったが、分析家が逆転移を単に妨害物と捉えていたことに不満を持った。Bionとの分析経験で、Goochは次のような印象を語っている。Bion自身は、自らの主観的経験を「自己開示」することはほとんどなかったが、Bionが解釈するときには、彼はいつも自分自身の情緒経験から解釈を引きだしているように感じたこと。Bionは、解釈を“そう思うんだが”“そんな気がする”というような断定を避けた言いまわしで表現したこと。すなわち、Bionは教条主義を避け、プロセスを大事にしたこと。Bionは、アナライザンドの協力を招くように、予備的な解釈を質問という形で行ったりしたこと。

Bionを信奉するアナライザンドとしての「理想化」を差し引くとしても、分析に臨むに当たっての、このようなBionの姿勢は、教条的だったとされるKlein,M.を「反面教師」（Bléandonu）としたものと見ることもできる。Bion自身は、Goochに対して、Kleinとの分析を次のように語ったという。

「解釈を与えられたとき、それが正しいとよく感じたものでした。でも、たいていは、その解釈はナンセンスだけれども、異を唱える価値はほとんどない、と思いました。なぜなら、解釈は、クライン婦人の意見の表明にほかならず、何の証拠もないように思えたからです。私が無視したり、理解できなかったり、返事を返さなかった解釈は、後になってみると、正しかったように思われました。クライン婦人は、彼女の感覚が捉えた素材の解釈を、私に伝えようと

しました。しかし、効果の判定は私の応答次第でした。これは何と陳腐な帰結でしょうか」。

Goochによると、Bionは“医原性”の抵抗の問題に、ことさら敏感だったという。あるとき、Bionが型どおりのクライニアン・ライクの解釈をしたので、Goochはそれに個人的怒りでもって反応した。その時Bionは、「私が今言ったことに真実があるかどうかわかりません。何か考えがありますか」と、Goochに聞いてきたという。Goochは、Bionとの体験から、良い分析とは、常に反論する“余地”が残されるべきだ、と学んだという。

今日の分析的見地からすれば、“反論する余地”がアナライザンドに残されているという視点は、極めて大切な臨床感覚であり、分析の世界でも浸透してきている考えのように思われる。「そう思うんだが」「そんな気がする」という解釈の仕方や、予備的な解釈を試みたことも、アナライザンドに反論や考える“余地”を残そうとした意図の表れだろう。

“余白”“余地”といった“白紙の空間”のテーゼは、Bionの「不在の乳房」を“新たな次元”に導く道標のように“予感[注13)]”させる。そこにおいて、“不在”は、これまで取り上げてきたような“哀しみ”の文脈ばかりではない相貌を立ち現すのである。

しかも、“空白”“余白”としての「不在の乳房」というテーゼは、次稿に登場する「グリッド」「究極の現実O」という「認識論」の究極から、Bion精神分析の第四期「記憶なく欲望なく理解なく」の“神秘性”の時代へと、劇的に“転向”していったBionの“謎”を解く重要な鍵まで隠されているのである。

Ⅳ　終わりに

本稿で筆者は、Bionの思考理論の発展・深化の道筋を辿り、突き詰めていけば、それが「不在の乳房」の認識論を眼目とすることを見てきた。しかも、“不在の認識”に対するBionの立ち位置は、それが妄想分裂ポジションであれ、抑うつポジションであれ、「剥奪」や「分離」の“抑うつ的次元”において認められるのが至当であった。

確かにここまでのBionは、“不在の認識”という射程に照準を絞り、彼の認識

論的精神分析を深化させてきたように思われる。だが、『要素』以降のBionは、「不在の乳房」を広い意味での「モーニング・ワーク」のテーマで見る視点の上に、新たに違った“神秘的”次元を提示し始める。それが「不在の乳房」との関連で、いかなる展開を遂げ、どのような“コンテインド（意味内容）”を充実させるのか、次稿で論考したい。

注１）この時期のBionの業績全体を俯瞰した論考として、福本(1999）による「解題」がある。彼は、Bionの『思索』（1992）を参考にしながら、「認識論的精神分析」のBionの思索の動因や由来を探ろうとしている。

注２）ただし、Kleinの名誉のために付言すれば、Bion（1976）はKleinのことを「小さな黒い猫」に喩え、「どんな抑制もしない」真実に開かれた人、というように高い評価を下しているし、Klein直系の弟子であるSegal,H.も、次のように、セント・ジョーンズウッドSt John's Woodにおけるメラニー・クライン碑の除幕式で、感動的なスピーチを残している。「先生としての彼女は、寛大で皆を鼓舞し、決して頭ごなしではありませんでした。彼女は皆の創造性を刺激し、こころから手助けしたりコメントしたりしました。彼女は常に私たち自身の考えを尊重し、勇気づけました」(Segal,J.2004)。このように、KleinがBionを受け入れることのできた「度量のある人」（松木、2001）で、その懐の中でBionの才能が育まれたことも、揺るぎのない事実なのだろう。古賀（2004）も、Bionの何度も繰り返された女性との外傷的別離を論じる中で、KleinがBionにとって「自分を裏切り見捨てる原初対象とは全く異なる女性性を持った対象であった」であろうと論及している。

注３）Symington,J.&N.（1996）も「コンテイナー／コンテインド」と「ホールディング」との異同について論じている。彼らによると、この二つの概念は次の三つの点で異なっているという。第一に、前者は「内的」であるが、後者は「外的か、あるいは内的と外的のあいだの移行段階」である。二番目には、前者は「感覚sensuous」に関わらないが、後者は感覚に大いに関わっている。最後に、前者は「営みactivity」なので、統合的でも破壊的でもありうるが、後者は肯定的であり、成長促進的である、という。

注４）なお、後に述べるグリッド縦軸における思考の発達は、先行するコラムが常に前概念となり、次のより抽象化された思考を呼びこむという、この考え方が生かされたものになっている。

注５）ちなみに、Bionは「もの想い」や「アルファ機能」とは別に、もうひとつの命名も考えていた。『思索cogitation』（1992）における1959年８月10日付けの記述には、「夢作業アルファ dream-work α」という用語が登場している。これは「もの想い」「アルファ

機能」と同様の意味内容を指すが、Bionはこの用語すら気に入らなかったと見え、より意図的な意味を欠いた「アルファ機能」という用語の方を採用している。

注6）Bionは『経験』の他のところでも、「無意識的思考」「夢思考」としてのアルファ機能について、例を挙げている。「歩行を学んでいると呼ばれる情動的経験をしている子どもは、アルファ機能のおかげでこの経験を蓄えることができる。最初意識して行わなければならなかった思考は無意識的になり、おかげで子どもは歩行に必要な思考作用をすべて、もはや少しもそれを意識せずに行うことができる」。

注7）Williams,M.H.（1985）やGrotstein,J.S.（2004b）なども着目しているところだが、Bionは、1918年8月8日、第一次世界対戦の戦車隊での戦闘で、ただ一人の生存者となり、この日に「私は死んだ」と『長い週末』（1982）に記している。さらに、『未来への回想』(1991)では、「－Kの日にちは、8月7日、8月8日である」(p168)と表現した。‘嘘’と‘偽り’で蔽われた戦争という「ビッグ・ゲーム・シューティング」(『長い週末』1982）は、Bionの－Kの“原体験”となり、－Kという「概念」を強烈に支え持つ“実感realization”となっているのだろう。

注8）Kや－Kの臨床理解･応用に関しては、O'Shaughnessy,E.（1981）やThorner,H.A.（1981）の論考などがある。－KやKに改変されぬ感覚印象が「偽りの知ること」として利用されたり、取り扱いがたい「未消化物」に終わってしまったりする臨床例を、彼らはわかりやすく解説している。しかし、彼らが－K的なものを一様に病理的なものだと見なしている視点は共通している。だが、そこに－Kの「非精神病的側面」を見ようとする新たな視点が現れた（Schneider,J.A.2005)。Schneiderは、－Kはパーソナリティによって利用することのできる、“コミュニケーション手段”だと言う。すなわち、エディプス王が真実を知る重みに耐えかね、自ら“目を瞑った”のと同じように、私たちは“恐ろしい真実”をそのままでは知ることができない。そのため、－Kは、「外的現実の横溢によって破綻から正気を守る、心的機能なのだ」と主張する。Schneiderは、羨望によって駆り立てられている－Kではなくて、「生き残ろう」とする意思によって駆り立てられる－Kの使用を提唱している。－Kにまでポジティブなコミュニケーション側面を汲み取ろうとする“目線”は、「排出」としての「投影同一化」から「コミュニケーション」としてのそれに比重が置かれるようになった現代クライニアンの視点と歩調を同じくするところがある。

注9）Bionは、K,－K,noK以外にも、－L,－Hを特に断りもなく記している。したがって、ことの詳細は明らかではないが、López-Corvo,R.E.（2003）：によると、－Lや－Kは、「何かの不在」に関連し、－Lは「恋愛性転移」に似た情緒であり、－Hは、自閉的患者における情緒と等価ではないかと論じている。さらに近年、松木（2004, 2005）が－Lに関して興味深い試論を展開している。松木によると、－Lとは「偽りの愛情であり、毒

素となり、こころを栄養不良にする」ものである。その実際例として松木は、façade object（ファサード・オブジェクト）という対象像を提示した。すなわち、「外見には美しさ、すなわち愛情溢れる善さや無垢さが表わされているが、それは実はまやかしの性質を持ち、その外面とは裏腹に内側には破壊的な不毛、さらには無力さや憎しみを隠し持っている対象である」。松木のファサード論は、－Lや－Hの未踏の領野に踏み込むものとして期待される。

注10）Ogden,T.H.（2004b）は、Bionのこの「抑うつ感情」を、「哀しみsadness」と表現したい、と述べている。Ogdenは、Bionの言う「抑うつ感情」の中に“悲哀”という「モーニング・ワーク」のニュアンスを敏感に嗅ぎ取っているのだろう。

注11）石田浩之（1992）、加藤典洋（2004）などが指摘するところだが、Lacan,J.も「ないこと」の意味を、「欠如」「喪失」「空虚」「不在」の様態から思索を加えようとしたようだ。たとえば、加藤は次のように述べる。

「『ないこと』があること、つまり『－A』があることと、何もないこと、つまり『0』であることとは、どう違うのだろうか。

ありていにいまわたしの手持ちの言い方で言えば、『ないこと』があることとは、たとえば恋人に死なれることである。何もないこととは、恋人がそもそもいないことである。恋人に死なれた男には、恋人がそもそもいない男とは違う何かがある。外から見れば、彼らは恋人のいない独り者である点、変わらないが、前者には、恋人の『不在』『喪失』『欠如』すなわち『ないこと』がある。それに比べ、後者には単に恋人の『無』だけがある。『無』とは『あること』もないが、『ないこと』もない、ということである。これに対し、この意味での『不在』『喪失』『欠如』は、『ないこと』がある、ということなのである」。

この後、加藤は石田のラカン論を引用しながら、“「ないこと」がある”という認識は言語によって始めて可能になる、というラカンの言語論を俎上に乗せる。すなわち、「ない」という様態は、記号や図や絵などによっては表わすことができず、言語のみがそれを表現可能にする、というのだ。

一方、Bionの「ないこと」の認識論においては、「悪い乳房」という誤った概念化に陥らずに、「ないこと」を“ない”として認識するためには、“抑うつ的次元”において“悲哀”の感情が、“ない”ところに場所を占めることが必然となる。したがって、Bionの不在論も、“ない”ところには「悲哀」という「情緒」が座を占めているわけであり、実のところは「何もない」ことを意味してはいない。

このように両者とも、“ないこと”の奥行きに、「意味」「情動」「無意識」を見ようとしているようだが、筆者の見るところ、Bionの“ないこと”は「抑うつ」「悲哀」という臨床的地平にその着地点を見据えるのに対し、Lacanはシニフィアン、シニフィエ

という記号的言語論に帰着していくように思われる。

一方、ラカン学者の新宮（1997）によると、Lacanの「不在の対象」論は、その不在の根源性、一次性を、Bionよりもさらに積極的に捉えなおそうとした試みであり、美と愛が生まれるための条件であり、人間の内部に組み込まれた始原的な欲望を形成する、と論じている。

いずれにしろ、BionとLacanという意外でもあり、好奇心もそそる取りあわせに、今後の研究が待たれるところだろう。

注12）重篤な病理の背後に“剥奪”や“分離”の「不在の対象」が結晶化しているというBionの視点を、その後臨床的にも理論的にももっとも継承していったのは、精神病よりもさらに早期の重篤な障害である自閉症の治療に果敢にも取り組んでいった分析家たちのように思われる。たとえば、Meltzer,D.（1975）によると、自閉症の浅薄で模倣的な防衛機制である「付着同一化」は、最早期の“分離”からくる破局を防衛しているものであるし、Bionの直弟子であるTustin,F.（1994）によると、自閉症者たちにとって乳首が口から離れる瞬間は、“ブラックホール”の奈落に落ち込むほどの、恐ろしくも原初的な喪失体験を意味する。このように自閉症研究者の眼差しは、“始原的な分離感”に注がれている（拙論2005参照のこと）。

注13）ちなみに「予感premonition」とは、Bionが『経験』の中で使用した用語である。「予感」とは、情動の領域に属し、思考における前概念作用に相当するものである。すなわち、憎悪も愛情の前駆体ならば、その憎悪の価値は憎んでいることにはなく、愛情の前駆体という位置づけが一義的になる。Bionは、「思考」にも「情動」にも、「意味」で満たされるのを待っている“空虚な乳房”を見ようとしていたように思われる。

参考文献

Abraham,K.(1924):'The influence of oral erotism on character-formation' In:Abraham,K.(1973) Selected Papers on Psychoanalysis. Hogarth Press,下坂幸三他訳（1993):『アブラハム論文集』岩崎学術出版社

Bion,W.R.(1957a):'Differentiation of the psychotic from the non-psychotic personalities' In:ibid. 義村勝訳（1993):「精神病人格と非精神病人格の識別」、松木邦裕監訳（1993):『メラニー・クライン　トゥディ①』岩崎学術出版社

Bion,W.R.（1957b):'On arrogance' In：Bion,W.R.（1967）：Second Thoughts.Jason Aronson

Bion,W.R.（1959):'Attacks on linking' In：ibid.中川慎一郎訳（1993):「連結することへの攻撃」、松木邦裕監訳（1993):『メラニー・クライン　トゥディ①』岩崎学術出版社

Bion,W.R.（1962a):'A theory of thinking' In:ibid. 白峰克彦訳（1993):「思索についての理論」、松木邦裕監訳（1993):『メラニー・クライン　トゥディ②』岩崎学術出版社

Bion,W.R.（1962b）:Learning from Experience. Reprinted（1984）, Karnac Books, In:Bion,W.R.（1977）: Seven Servants. Jason Aronson, 福本修訳（1999）:「経験から学ぶこと」『精神分析の方法Ⅰ』法政大学出版局

Bion,W.R.（1963）:Elements of Psychoanalysis. Reprinted（1984）, Karnac Books, In:Bion,W.R.（1977）: Seven Servants. Jason Aronson, 福本修訳（1999）:「精神分析の要素」『精神分析の方法Ⅰ』法政大学出版局

Bion,W.R.（1965）:Transformations. Reprinted（1984）, Karnac Books, In:Bion,W.R.（1977）: Seven Servants. Jason Aronson, 福本修、平井正三訳（2002）:「変形」『精神分析の方法Ⅱ』法政大学出版局

Bion,W.R（1967）: Second Thoughts.Jason Aronson

Bion,W.R（1970）: Attention and Interpretation.Reprinted（1984）, Karnac Books, In : Bion,W.R.（1977）: Seven Servants.Jason Aronson, 福本修、平井正三訳（2002）:「注意と解釈」『精神分析の方法Ⅱ』法政大学出版局

Bion,W.R（1976）:'On a quotation from Freud' In:Bion,W.R.（1994）:Clinical Seminars and Other Works.Karnac Books, 祖父江典人訳（1998）:「フロイトからの引用について」『ビオンとの対話――そして、最後の四つの論文』金剛出版

Bion,W.R（1982）:The Long Week-End 1897-1919:Part of a Life.Reprinted（1991）, Karnac Books

Bion,W.R.（1985）:All My Sins Remembered :Another Part of a Life. The Other Side of Genius: Family Letters.Reprinted（1991）, Karnac Books

Bion,W.R.（1991）: A Memoir of the Future. Karnac Books

Bion,W.R.（1992）: Cogitations. Karnac Books

Bion,W.R.（1994）: Clinical Seminars and Other Works. Karnac Books, 祖父江典人訳（1998）:『ビオンとの対話――そして、最後の四つの論文』金剛出版, 松木邦裕、祖父江典人訳（2000）:『ビオンの臨床セミナー』金剛出版

Bléandonu,G.（1994）: Wilfred Bion : His Life and Works 1897-1979. Free Association Books

Davison,S.（report）（2002）:'Panel reports:Bion's perspectives on psychoanalytic method' The International Journal of Psychoanalysis83, 913-917

Ferro,A.（2002）: 'Some implication of Bion's thought : the waking dream and narrative derivatives' The International Journal of Psychoanalysis 83, 597-607

Freud,S.（1900）:'The interpretation of dreams' In:Standard Edition, vol. 4 － 5 , Hogarth Press, 高橋義孝訳（1968）:「夢判断」『フロイト著作集２』人文書院

Freud,S.（1905）:'Three essays on the theory of sexuality' In : Standard Edition,vol. 7 ,Hogarth Press,懸田克躬、吉村博次訳（1969）:「性欲論三篇」『フロイト著作集5』人文書院

福本修（1999）:「解題」『精神分析の方法Ⅰ』法政大学出版局

Godbout C. (2004) : 'Reflection on Bion's "elements of psychoanalysis" : experience, thought and growth' The International Journal of Psychoanalysis 85, 1123-1136

Grinberg, L. (2000) : 'Foreword' In : Talamo,P.B.et al.(ed) (2000) : W.R.Bion : Between Past and Future. Karnac Books

Grotstein, J.S. (1981) : 'Who is the dreamer who dreams the dream and who is the dreamer who understands it?' In : Grotstein, J.S. (ed) (1981) : Do I Dare Disturb the Universe? Karnac Books

Grotstein, J.S. (2004a) : 'The seventh servant : the implication of a truth drive in Bion's theory of "O"' The International Journal of Psychoanalysis 85, 1081-1101

Grotstein, J.S. (2004b) : '"...Perchance to Dream..." : The "Truth Instinct" and the profounder mission of dreaming in light of Bion's contributions'「・・・夢を見るやもしれぬ・・・——ビオンの業績からみた『真理本能』と夢見ることのより深遠な使命」精神分析研究第48巻3号、214－222

石田浩之（1992）:『負のラカン——精神分析と能記の存在論』誠信書房

加藤典洋（2004）:『テクストから遠く離れて』講談社

Klein, M. (1932) : The Psycho-Analysis of Children. In : Klein,M. (1975) The Writings of Melanie Klein vol. Ⅱ, Hogarth Press,衣笠隆幸訳、小此木啓吾他監修（1997）『児童の精神分析』誠信書房

古賀靖彦（2004）:「ビオン　クラインとの出会い」、松木邦裕編（2004）:『現代のエスプリ別冊　オールアバウト「メラニー・クライン」』至文堂

López-Corvo, R.E. (2003) : The Dictionary of the Work of W.R.Bion. Karnac Books

Mason, A. (2000) : 'Bion and binocular vision' The International Journal of Psychoanalysis 81, 983-989

松木邦裕（2001）:「クラインの二人の分析的息子たち——ウィニコットとビオンの場合」精神分析研究第45巻2号、140－151

松木邦裕（2004）:「精神分析で今なにが新しいか」小寺精神分析セミナー講義

松木邦裕（2005）:「Façade Object、あるいはマイナスLについて」日本精神分析学会第51回大会抄録集、39－41

Meltzer, D. (1975) : 'Adhesive identification' In : Meltzer, D. (1994) : Sincerity and Other Works. Karnac Books

Meltzer, D. (1980) : '"The diameter of the circle" in Wilfred Bion's work' In : Meltzer, D. (1994) : Sincerity and Other Works : Collected Papers of Donald Meltzer. Karnac Books

Ogden. T.H. (2003) : 'On not being able to dream' The International Journal of Psychoanalysis 84, 17－30

Ogden, T.H. (2004a) : 'An introduction to the reading of Bion' The International Journal of Psy-

choanalysis 85, 285－300

Ogden, T.H.（2004b）:'On holding and containing, being and dreaming' The International Journal of Psychoanalysis 85, 1349－1364

O'Shaughnessy, E.(1981):'A commemorative essay on W.R.Bion's theory of thinking' The Journal of Child Psychotherapy 7 , 181-192

Sandler, P.C.（2005）: The Language of Bion : A Dictionary of Concepts. Karnac Books

Schneider, J.A.（2005）:'Experiences in K and －K' The International Journal of Psychoanalysis 86, 825-839

Segal, J.（2004）: Melanie Klein.（Second Edition), Sage Publications, 祖父江典人訳（2006）:『メラニー・クライン――その生涯と臨床・理論』誠信書房出版予定

新宮一成（1997）:『無意識の組曲――精神分析的夢幻論』岩波書店

祖父江典人（2004a）:「共感の2種――『融合としての共感』と『分離としての共感』――」心理臨床学研究第22巻第1号、1－11

祖父江典人（2004b）:「Wilfred R. Bion 研究（Ⅲ）――『体制乳房』との創造的インターコースと『不在の乳房』の結晶化――」愛知県立大学社会福祉研究第6巻、15－27

祖父江典人（2005）:「心理臨床における対象関係論的精神分析の臨床的意義」東京都立大学博士論文

Spillius, E.B.（Ed)(1988):'Introduction' Melanie Klein Today, vol. 1 . Routledge, 松木邦裕監訳（1993）:「総説」『メラニー・クライン　トゥディ①』岩崎学術出版社

Steiner, J.（1993）:Psychic Retreats:Pathological Organizations in Psychotic, Neurotic and Borderline Patients. Routledge, 衣笠隆幸監訳（1997）:『こころの退避』岩崎学術出版社

Symington, J.& N.(1996):The Clinical Thinking of Wilfred Bion. Routledge, 森茂起訳(2003):『ビオン臨床入門』金剛出版

Thorner, H.A.（1981）:'Notes on the desire for knowledge' The International Journal of Psychoanalysis 62, 73-80

Tustin, F.（1994）:'The perpetuation of an error' The Journal of Child Psychotherapy, 20, 3-23、木部則雄訳（1996）:「誤謬の永続化」『Imago vol7-11 特集自閉症』青土社

Williams, M.H.（1985）: 'The tiger and "O"' Free Associations 1 , Free Associations Books

Winnicott, D.W.(1956):'Primary maternal preoccupation'In:Winnicott, D.W.(1965):The Maturational Process and the Facilitating Environment. International University Press

Winnicott, D.W.（1958）: 'The capacity to be alone' In : ibid.